第 305 回(9 月)

「GIS (地図情報システム) を活用したビジネス刷新」

株式会社エフジェネックス (国際航業グループ) 代表取締役社長 櫻井博行氏

わが社のハイウェイ・サービスについて説明する前に、米国の情報ハイウェイについてコメントしたい。アメリカは 1991 年ごろから情報ハイウェイということを使い始めた。日本に紹介があった時には、光ファイバー網を張り巡らせましょう、というハード面に目がいてしまった。ところが米国は、ハイウェイのコンテンツとして、地図のデータを流し込もうとしていたのである。

連邦政府はこの点でかなり頑張ってきた。本年末までに連邦域内の地図は全部電子化される。その結果、日本からインターネットでカリフォルニア州の地図を欲しいとリクエストすると、5 ドルか 6 ドルで手に入るのである。縮尺でいえば、二万五千分の一の地図である。おそらく日本で日本の二万五千分の一の地図を電子化して手に入れようとするとなん万円かかるのではないか。カリフォルニアは日本の国土と同じ位の広さである。

米国では最近デジタル・アースという表現を使っている。これは地図の架空空間を標準化して、すなわち ISO にして、全ての国がそれに準拠せよ、という考え方である。注目すべきは、地図をシングル・バイトにしようと主張している。シングル・バイトでは、英語の 27 文字しか表現できない。日本語にする時はダブル・バイトに変換しなければならない。ヨーロッパが大反対している。例えばドイツ文字、ロシア文字でも 27 文字の規格外の文字がある。アラビア文字も使えなくなる。

ここに米国の国家戦略がある。米国の方式をワールド・スタンダードにして、自分たちの言語で全てを進めようとしている。米国の情報ハイウェイという考え方はコンテンツまで入っている。日本は光ファイバー網でとまっている。